地域づくり
Close-up

伝統を子どもたちに継承し地域の活性化に貢献したい

友枝子供神楽

友枝神楽を次世代に継承する

友枝神楽の歴史は古く、明治20年代に、旧下毛郡真坂村佐知の佐助を師匠として神楽組ができたのが始まりとされています。

先人から受け継がれてきた友枝神楽を子どもたちに継承し、将来の担い手を育てること、また神楽を通して心豊かな大人になってもらうことを目標に掲げ、平成23年度に地域づくり活動団体に認定されました。

神楽舞いは昔も今もぼくらのヒーロー

現在、神楽講のメンバーは26名で、そのうち、子どもは15名います。大人の舞手の中心になる20歳から30歳のメンバーは、現友枝神楽講長の松山秀木さんと松山文男さんが後継者不足により神楽講が途絶えることを憂慮し、昭和62年に発足した「西友枝四区子供神楽講」で神楽を習っていた当時の子どもたちです。

子供神楽のメンバーの池田和末君（7歳）は「お祭りでお兄ちゃんたちが舞っている鬼がカッコ良かったのでぼくもやりたいとお父さんにお願いした」、北山晴彦君（6歳）は「ぼくもあんな風に鬼になって舞ってみたいと思った」と、子どもたちが神楽を習い始めたきっかけは、地元の祭りで知り合いのお兄ちゃんたちが力強く舞う姿に刺激されたようです。昔も今も神楽舞は憧れのヒーローなんです。友枝子供神楽代表の大石正芳さんは「西友枝は子どもの少ない地区ですから、一人、また一人と友達や兄弟に誘われてメンバーが増えていきました。また、お父さんも神楽の経験者が多いおかげで助かります」と話します。

鬼の気持ちを舞いに表す

まず始めに習う演目は、御先に登場する猿田彦命（鬼）の相方である、天鈿女命こと「ホシャドン」です。練習を始めて2年目の松岡亜紀ちゃん（11歳）は「ホシャドンは幣を大きくふったり小さくふったりするところが難しくて何回も練習しています」と楽しそうに答えてくれました。ホシャドンで神楽の舞い方の基本が習得でき、演目の流れがつかめてきたら次はいよいよ鬼の練習です。鬼は舞いながら鬼杖も上手に扱えなければなりませんし、喜怒哀楽も表現しなければなりません。松岡亮佑君（10歳）は「鬼が頭をふるところが一番難しいのでこれからも練習していきます」と話していました。

神楽を通して学ぶ

練習を始めて長い子どもで7年目を迎えます。演目では御先、乱御先、宝満、花神楽、四神宝剣、大蛇退治を舞えるようになりました。中でも大蛇退治には独特な言葉の掛け合いがあるため、昔の言葉を理解させ、子どもたちに教えるのはとても大変です。

また、ジャバラの大蛇を操作するのは、大人でも重いので子どもには無理かと諦めかけていましたが、練習とトレーニングのおかげで舞えるようになりました。

大石己咲君（11歳）は「大蛇退治が舞えるようになるまで半年間練習しました。大蛇を上げたり下げたりがうまくいかず、昨年門司港レトロで行われた京築フェスタで成功したときはうれしかったです」と話していました。これからは三神や友枝神楽に昔から伝わる二人御子舞の練習を始める予定です。また、大石吾乃君（10歳）は「たくさん練習して大人でも難しい米神楽を舞えるようになりたいです」と話してくれました。

子供神楽の練習を通して身につけてほしいことは、舞いだけではありません。練習時の挨拶や道具や衣裳の扱いなどです。教えてもらっている大人や、送り迎えをしてくれる保護者の皆さんに、きちんと挨拶ができ感謝の気持ちを持つことは、大きくなって社会に出た時にきっと役に立つはずです。松江一陽君（11歳）は「いろんな所に行って他の神楽を見ることで、舞いだけじゃなく、挨拶の仕方など勉強することはたくさんあります」と話しています。

地域に育てられた神楽で地域に貢献していく

「ゆいきらら」で練習していることもあり、宿泊している皆さんや、地域のイベントでも披露する機会が増えました。

8月29日（金）には閉校した西友枝小学校の同窓会が「ゆいきらら」であり、御先などを舞いました。当時の校長先生だった田添さんの教え子である大石己咲くんが鬼になって背負って回した時は大きな歓声があがりました。

友枝神楽がこうして長く続いてこれたのも、地元の皆さんの温かい声援のおかげだと思います。また、9月20日（土）に豊前市の京築神楽定期公演」や9月23日（火・祝）にげんきの杜で行われる交通安全フェスタに参加します。

これからも多くの場所で神楽を披露することで、1人でも多くの方に友枝子供神楽を知ってもらい、幅広い年代層の方に楽しんでいただきたいと思っています。

●問い合わせ先　代表 大石正芳さん
☎090-9599-8192